

都道府県・ 指定都市番号	44	都道府県・ 指定都市名	大分県	研究課題番号・校種名	3 (5) 小・中学校
				領域名	校種間連携
研究課題	<b>学校全体で取り組む研究課題</b> (5) 校種間の連携による教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
学校名  (園児・児童・ 生徒数)	豊後大野市立朝地小学校 (85 人) 豊後大野市立朝地中学校 (62 人)		学校・地域の特色及び実態等 ・市指定「連携型小・中一貫教育校」 ・施設一体型校舎 ・コミュニティ・スクール		
所在地 (電話番号)	〒879-6222 大分県豊後大野市朝地町朝地 2030 番地 0974-72-0068 (朝地小学校) 0974-72-0067 (朝地中学校)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	<a href="http://syou.oita-ed.jp/asazi/">http://syou.oita-ed.jp/asazi/</a> (朝地小学校) <a href="http://tyu.oita-ed.jp/asazi/">http://tyu.oita-ed.jp/asazi/</a> (朝地中学校)				
<b>研究のキーワード</b> 「小中一貫教育カリキュラム」「言語活動の充実」 「伝え合う力の育成」「カリキュラム・マネジメント」					
<b>研究結果のポイント</b> ○ 子供たちの 9 年間の連続した「学び」を進めるうえで、軸となる活動（伝え合う力）と各期における目指す姿を明確にしたことで取組を焦点化できた。 ○ 言語活動を意識した授業づくりに取り組んできたことで、児童生徒は多様な価値観に触れる機会が増え、自分の考えと比較検討しながら学ぶ姿勢が身に付いてきている。 ○ 生活科・総合的な学習の時間のカリキュラム編成が、系統性・継続性のあるものとなった。 ○ 保護者の「家庭学習」の意識が向上するとともに、教育活動全般に対する理解が深まった。					

1 研究主題等

(1) 研究主題

9 年間の子どもの育ちを支える教育課程の編成と学習指導の展開

(2) 研究主題設定の理由

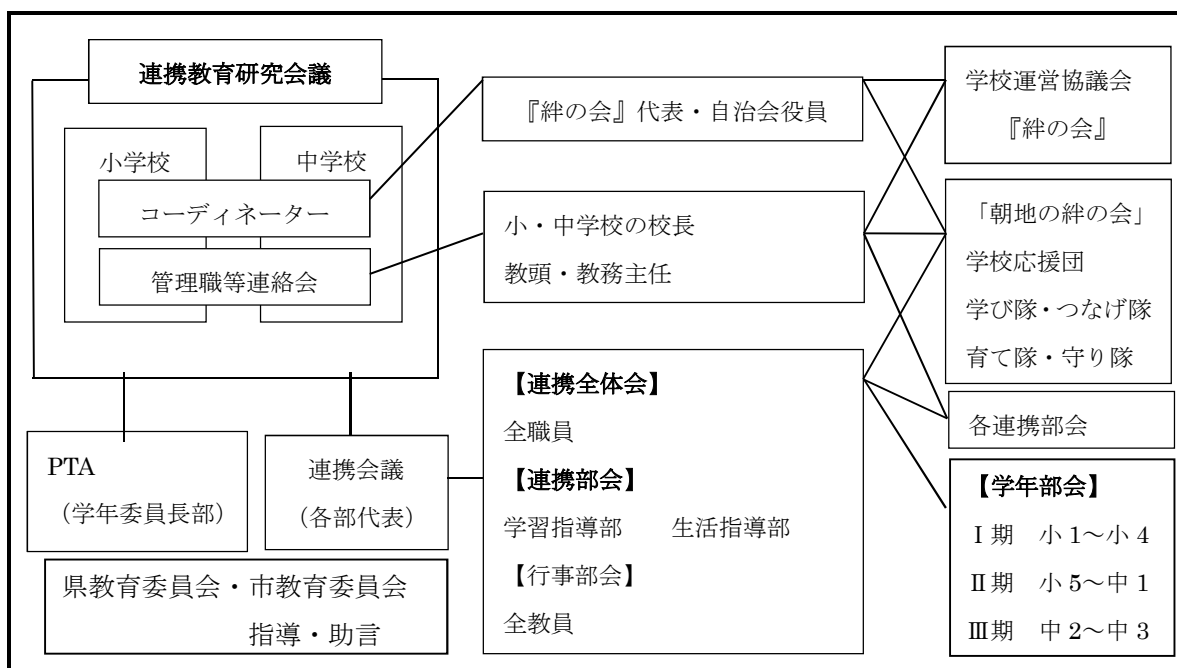
朝地小・中学校は、大分県南西部の山あいの地域に位置し、町内に 1 小学校 1 中学校がある。平成 16 年の校舎移転に伴って小・中学校が施設一体型として建設され、平成 26 年度からは豊後大野市教育委員会の「連携型小・中一貫教育校」の指定を受け現在に至っている。

これまで、児童生徒の「学び」と「育ち」の系統性・連続性を図っていくために、小・中の教職員だけではなく地域・保護者と目指すところを共有し協働した取組を行ってきている。具体的には、小・中相互の乗り入れ授業や体育祭・文化祭等学校行事の合同開催、小・中 P T A の一体化、学校応援隊の積極的活用などがあげられる。

しかし、学校評価（自己評価・学校関係者評価）等から、「周りの人と上手にコミュニケーションを取る」ことや「自ら考え、進んで活動する」ことを苦手とする児童生徒の課題が明らかになった。そこで、「伝え合う力」を核とした言語活動を取り入れた授業づくりを研究の中心に据え、9 年間の連続した「学び」の質を高めていくことで、児童生徒の課題の克服に当たることとした。

また、検証の場として「総合的な学習の時間」を設定し、学年間の縦のつながりと国語科を中心とした横のつながりを重視した小中一貫教育カリキュラムを作成し実践することとした。

### (3) 研究体制



### (4) 2年間の主な取組

平成29年度	4月	連携教育研究会議・連携部会	研究推進への共通理解（目的・方向性等）
	6月	国研調査官学校訪問	研究の方向性の確認・全体研修会
	7月	連携部会・先進地視察	呉中央学園視察・「伝え合う力」の全体研修
	11月	連携部会・先進地視察	鹿野小中学校視察・カリキュラム作成（国語科）
	3月	連携教育研究会議・連携部会	本年度のまとめ
平成30年度	4月	連携教育研究会議・連携部会	研究推進への共通理解（目的・方向性等）
	7月	連携部会	カリキュラム作成（社会科）
	8月	連携部会	「伝え合う力」の全体研修（再構築）
	10月	校種間連携研究発表大会	実践発表・公開授業
	11月	連携部会	発表会反省・今後の取組の確認
	2月	連携部会	研究協議会の報告、本年度のまとめ

## 2 研究内容及び具体的な研究活動

### (1) 研究内容

#### ○ 小中一貫教育カリキュラムの編成

9年間のカリキュラム区分を4-3-2として、その区分ごとに目指す資質・能力を学校の教育目標に照らして明らかにし、9年間の教育課程を作成する。作成の際には、9年間の系統性や継続性を重視し、学習内容の配列の組み替えや単元構成の工夫等を行い、児童生徒の発達段階や実態により適した指導計画を立てる。また、各期のゴールに近付くための手段として「伝え合う力」を核とした言語活動を取り入れた授業づくりを行う。

○ 言語活動の充実

「伝え合う力」を核とした学習指導の工夫を、小・中の教職員が9年間の系統性を重視して実践する。「伝え合う力」を育むために、ア、「問いの工夫」イ、「ツールの工夫」ウ、「場の工夫」の3つの工夫を、児童生徒の実態をもとにして系統的に取り入れることによって、主体的・対話的で深い学びへとつなげる。

○ 家庭との連携協働

保護者と連携し「学びに向かう力の育成」や「家庭学習の充実」を図る。具体的には「学習の手引き」を基に、学級懇談会において保護者間で学習の様子についての情報交換の場を設定し、保護者を含めた家庭学習への意識向上を目指す。また、家庭学習時間表や手帳を活用し、児童生徒の頑張りを保護者とともに応援する取組を行う。

(2) 具体的な研究活動

○ 小中一貫教育カリキュラムの編成

ア 9年間で育てる「めざす子ども像」の共有化

- (ア) 小中連携アクションプランの作成。
- (イ) 各期(4-3-2)で育成すべき資質・能力の明確化。
- (ウ) 各教科・各領域の一貫構想図の評価・見直し。

イ 「生活科」・「総合的な学習の時間」を核とした小中一貫教育カリキュラムの作成

- (ア) 学習内容を「ふるさと(キャリア)学習」「いのち(人権)」の2本柱として作成。
- (イ) 学年間の系統性と継続性の確保。
- (ウ) 国語科・社会科での学習内容の配列の組み替えや単元構成の工夫。

○ 言語活動の充実

ア 「伝え合う姿」を4つの観点で整理

- (ア) 期ごとの目指す「伝え合う姿」を4つの観点に基づいて整理した。(下図)
- (イ) 「伝え合う場」のある単元構成とする。また、指導案に明確に位置付ける。
- (ウ) 一人一人の工夫で終わらせない授業改善(小・中互見授業の充実)

イ 「伝え合う力」を育むために。

- (ア) 問いの工夫  
あさじの6つの思考スキル
  - (イ) ツールの工夫  
思考ツール等の活用
  - (ウ) 場の工夫  
授業形態の工夫  
振り返りの場の工夫
- ウ 基盤となる仲間づくり
- (ア) 「あさじの学びの約束」の見直しと学習目標の設定。

	I期	II期	III期
もつ	自分の考えをもつ。	理論や根拠を明らかにして自分の考えをもつ。	多様な視点と根拠を明確にして自分の考えをもつ。
聞く	相手の考えと自分の考えを比べながら最後まで聞く。	相手の考えと自分の考えの共通点や相違点を考えながら聞く。	相手の考えと自分の考えを比較し、共通点や相違点を整理しながら聞く。
話す	自分の考えを最後まで話す。	自分の考えを理由や根拠を明確にして話す。	自分の考えを理由や根拠を明確にして、相手に納得してもらえるように話す。
深める	自他の考えが分かり、自分の考えをより良くする。	自他の考えを理解しながら、自分の考えを明確にする。	自他の考えを理解しながら、本質に迫る考えを導き出す。

○ 家庭との連携協働

ア 学習方法の共通理解

- (ア) 家庭学習の手引きの見直しと活用。

(イ) P T Aの学校応援隊(学年委員長部)と連携をして、学級P T Aにおいて「家庭学習について」の意見交換を毎学期実施。

イ 見通しをもって家庭学習に取り組む児童生徒の育成

(ア) 曜日等で課題のパターン化(課題計画表を作成し計画的な家庭学習を支援)

ウ 児童生徒の頑張りを応援する取組

(ア)「家庭学習時間表」(小)・「手帳」(中)を有効利用することで、子ども自身が見通しと振り返りを行うことで自己管理能力を育成

### 3 研究の成果と課題(○成果●課題)

- 9年間の学びの連続性を意識した「生活科」「総合的な学習の時間」のカリキュラムを編成することができた。更に、同じテーマの学年間で交流する中で、各期の目指す姿を基に、それぞれのねらいを明確にすることができた。
- 「伝え合う場」のある単元構成や授業形態の工夫を取り入れた授業づくりに取り組んできたことで、児童生徒のコミュニケーション力が伸びてきている様子が見えてくる。また、自己の考えと他者の考えを比較・検討しながら学ぶ姿勢が身に付いてきている。
- 学校での学びを家庭学習につなぐとともに、保護者同士の意見交換の場を設定し、家庭と連携して児童生徒の学びを支えたことが、学習意欲の向上や学習時間の増加につながった。またアンケートから保護者の本校の一貫教育への理解が深まったこともわかった。
- 児童生徒が「伝え合う力」を様々な場面で自ら生かしていくためには、児童生徒自身が「伝え合う姿」をより意識することや「思考スキル」を選択し問題を解決していく等の学習活動を行う工夫が必要である。
- 保護者の家庭学習への関わり方に、大きな個人差がある。また、家庭学習の定着率も向上したが、特定の児童生徒の改善は進まなかった。こうした状況にどのような手立てが必要なのかという話し合いが必要である。
- 「カリキュラム表」の作成において、毎年、学級担任や教科担任が各教科等毎に、新年度の行事に合わせて変更点を修正しなければならない。変更を容易にできる工夫が急務である。

### 4 今後の取組

#### (1) 小中一貫教育カリキュラムの編成

- ・「国語科」のカリキュラムの検証・改善、「社会科」のカリキュラムの実践
- ・行事等にスムーズに対応できるカリキュラム表の工夫改善。

#### (2) 言語活動の充実

- ・児童生徒自身が「伝え合う姿」をより意識して学習活動を行う手立ての工夫。

#### (3) 家庭との連携協働

- ・Ⅲ期で実施した「手帳」をⅡ期から実施。
- ・個に応じた支援体制づくり。